

書 評

草光俊雄著『歴史の工房
——英国で学んだこと』
(みすず書房、2016)

松家 仁之



草光俊雄さんと私をつなげたのは一冊の本だった。みすず書房から刊行された『明け方のホルン』である。

ももとは一九九七年に小沢書店から刊行された本だったが、残念ながら小沢書店はもうない。十年余りの歳月を経て、みすず書房の「大人の本棚」の一冊として復刊された。若草色の本が書店で目にとまり、タイトルにも惹かれて手にした。昨今の出版事情からすれば、復刊されるのは稀な出来事である。

「はじめに——狐狩りの夢」を立ち読みする。とたんにひきこまれ、本を閉じてレジに向かった。以下、少し長くなるが引用する。

「ポイント・トゥ・ポイントというレースがある。いってみれば競馬のクロスカントリで、野原や林の中を駆け抜けて速さを競う。当然、ヘッジと呼ばれるサンザシなどでできた生け垣や小川を越えて走る障害物競走、ステープルチェイスという性格もあり、競馬場で行われるレースの原型である。そのまた原型である狩猟の面影もまだ色濃く残っている。英国の田舎でよく見られる風景で、特にサセックス、ケントなどの南部、そしてウォリックシャーやレスタシャーなどの中部、サマセットやデヴォン等の西部諸州などで今でも盛んに行われている。秋から早春にかけて主に冬の季節に行われるが、冷たい冬の朝の空気の中、湯気を立てながら十数頭の馬が野原を疾走する様子は非常に気持が昂揚するものである。

ポイント・トゥ・ポイントをそんなに見たわけでもないが、それでもレースの始まる前の緊張感、騎手や見物人や応援する人たちの間に漂う期待感や、ある種の一体感を体験するのは心躍るものがある。パーバのジャケットを着て、ハンティングをかぶり、パイプをくわえた初老の男が仲間とレー

スの予想をたてているかと思うと、美しい若い女性が色あざやかなスカーフを肩にはおり、緑色のハンターの長靴でぬかるみの中を歩きながら夫か恋人の騎手を激励している。そう、騎手はアマチュアで、プロではない。しかし第一級の乗り手たちである。レンジ・ローヴァの荷台からポットに入った熱い紅茶かコーヒーを出して飲んでいる家族たち、馬の世話に最後まで余念がない馬丁たち、と空気はなごやかながら、次第にはりつめてくる。馬券を売る男たちの賭率を呼ばれる声がさらに大きくなって、興奮はいやがうえにも昂まってくる」

(草光俊雄『明け方のホルン』)

地名、固有名詞、服装などのディテールを丁寧に拾い、冬の情景をありありと描いて、海外の異文化を伝える見事な文章である。本篇では、第一次世界大戦に出征したイギリスのマイナー・ポエツ七人が選ばれ、その作品と生涯が描かれる。この本のおかげでエドワード・トマスは私にとって特別な詩人のひとりとなり、草光俊雄の名前も記憶に刻まれることになった。

その名前との再会は、二年あまり前、イタリア文学者、翻訳家、エッセイストであった須賀敦子の未公開書簡集『須賀敦子の手紙』を編集していたときのこと。

須賀さんが亡くなり、全集が刊行されてから十年以上が経過して、それまでほとんど誰も知らなかった友人夫妻に宛てた五十五通の手紙の存在が明らかになった。四半世紀におよぶ交友は、夫妻がずっとアメリカに在住していたにもかかわらず、深く、ほがらかで、親密なものだった。

須賀さんと最初に知り合ったのは慶應義塾大学にやってきたアメリカ人留学生ジョエル・コーンさんだった。その恋人となり、やがて妻となるスマ・コーン(旧姓・大橋須磨子)さんともウマが合い、心を許しあう関係を深めてゆく。ジョエルさんは日本文学研究者となり、のちにハワイ大学教授になった。

須賀さんよりひとまわりほど年下だったコーン夫妻もすでに老境に入り、将来、手紙が散逸してしまうことを不安に感じはじめたらしい。保管先を須賀さんの実妹に相談することとなり、やがてそのコピーの束が私の手元にも届いた。

プライベートな手紙である。背後に誰かの気配を感じながら、万年筆の筆跡を一通ずつたどっていると、文芸批評家の篠田一士氏の急死に触れる手紙のなかに、「昨日、同僚のわりと仲のいい草光さんという人が、私の部屋に来て、一寸、話をきいて下さい、篠田さんの訃報を読まれましたか、と言うのです」とあった。びっくりしたが、意外ではなかった。しかも大学関係者には辛辣であることの多い須賀さんが「わりと仲のいい」と書いている。これはかなりの褒め言葉である。

篠田一士氏が亡くなったのは一九八九年四月。草光さんは一九四六年十一月生まれだから、このとき四十二歳。須賀さんは一九二九年二月生まれだから、六十歳。デビュー作『ミラノ 霧の風景』刊行の前年である。草光さんは須賀さんよりひとまわり以上若い。

須賀さんはどうやら——ここから先は邪推の域を出ないが——文学の話のできる年下の男をさりげなく、しかし厳しい目で選別し、しかも相手に「選ばれた」と気づかせないまま、弟分として手なづけてしまう天賦の才があったのではないか、とおもう。

『歴史の工房 英国で学んだこと』を通読すれば、イギリス社会経済史・文化史家である草光俊雄さんが、須賀さんの「お眼鏡」にかなった人であることは歴然とする。本書の序文に「わたしは歴史も文学であるという立場に立ちたいと考えている」と旗幟鮮明に書く先の、同じ序文からの引用を続けよう。

「今回これまで書いてきたエッセイの中から人物を採りあげたものを中心に
して一冊を編もうと考えたとき、その数が意外に多いことに気が付いた。
人間についての興味・好奇心がわたしには強いのかなと思うとともに、歴史とは結局人間についての関心の上に成り立っている学問なのだということに思い至ることもなった。伝記とか自伝、書簡集が好きだということと関係があるかもしれない」

イギリスに暮らしていた頃、草光さんは著名な日本人(西脇順三郎、小林秀雄、林達夫など)が亡くなると『タイムズ紙』に訃報記事を書いたという。「オビチュアリ」と呼ばれる訃報記事は伝記の国イギリスの面目躍如の名物欄で、それを書く機会を与えられていたとは驚くばかりだが、「どん

な人の一生も読んでいて興味深い」と思う草光さんの「オビチュアリ」の筆の運び具合は、本書のそこここに響くトーンからも十分に想像できる。

『ミラノ 霧の風景』『ヴェネツィアの宿』『コルシア書店の仲間たち』『トリエステの坂道』など須賀さんの作品もまた、亡くなった夫、両親、友人たちとの日々を追想するものである。その核心にあるのは人間への深い関心であり、人間を動かした時代の空気である。そのようにして須賀敦子の文学には歴史が含まれていた。つまるところ草光さんが同じ志向の持ち主であることを須賀さんは早々に嗅ぎつけていたのではあるまいか。

本書に登場する歴史学者たち、たとえばラファエル・サミュエル、エリック・ホブズボウム、ピーター・パーク、G・M・トレヴェリアンといった人々が、それぞれの学説を唱える学者としてばかりではなく、ある時代背景をともしながら活躍した表情豊かな人物として描かれていることの原因をあらためて指摘する必要はないだろう。読者は歴史学を体温や息づかいとともに知るよろこびを感じ、歴史学に足を踏み入れる誘惑にかられるはずだ。草光さんの筆致は歴史をそのように記述しようとした人間への関心をもかきたてる。私もまた、本書に登場する歴史学者の書籍を何冊も手に入れることになってしまった。

もうひとつ、眠っていた感情を呼び覚まされたように感じたのは、徒弟関係のもたらす無形の財産についてである。徒弟関係には人間関係の煩わしさ、理不尽、非効率、といった弊害がともなうこともある。産業革命、IT革命につづき、AI革命が進展する二十一世紀に、芸の継承の方法としての徒弟関係は廃れてゆく運命にあるかもしれない。しかし「歴史工房での徒弟時代」の章に描かれる草光さんの徒弟関係はひたすら幸福なものだ。時代が変わってもその価値は変わらないと信じさせる力を草光さんの経験は持っている。

最初の英国滞在中の印象的な出会いから始まって、ロンドンのイースト・エンドにあるラファエル・サミュエルの家——それは絹織物工たちが住んでいた十八世紀のテラスハウスなのだが——にたびたび通ううち、ラファエルのパートナーであった女性とその子どもたちが家を出てゆくなりゆきとなり、空いた部屋を借りる奇遇を得る。この前後の場面は、丁寧に人物を追って描く静かな映画の光景のようだ。

A4のコピー用紙をいつも持ち歩き、アイデアであれ、人から聞いた話であれ、「一枚の紙に一項目」だけ書き留めてファイリングするシステムで考えの断片を整理し、論文の執筆に生かすラファエル親方の方法は、パソコンで同じことを試みても同じ結果にならないだろう。それはなぜか。このエピソードにはちょっとしたオチがあり、ストーリーテラーの草光さんらしい逸話になっている。

『澀江抽齋』にオーラル・ヒストリーの手法を見出す「鷗外の史伝と社会史」の章も草光さんならではの指摘があり、鷗外の史伝論として秀逸である。読書家の父から『澀江抽齋』を読めと言われ、若いころは文体についていけず閉口したものの、なぜか繰り返し手にした須賀敦子は、年を重ねるうち史伝を書いた鷗外の力を認めざるを得なくなる。その過程は未公開書簡でも追うことができる。草光さんとふたり、『澀江抽齋』をめぐる語りあう光景が目浮かぶようだった。

草光さんの次の本は、ブルームズベリー・グループの一角をしめた経済学者ジョン・メイナード・ケインズがテーマであるらしい。「過去の間人を共感を持って知ることによって自分の人生を豊かにしていくことができないのなら、何のための歴史なのだろうか」と書く草光さんによるケインズ。こんな魅力的なテーマがあろうか。

——作家